

京都市ウッド・チェンジアクション推進会議令和6年度第1回 議事概要

1 日時：令和6年4月11日(木)10時～11時45分

2 場所：京都経済センター会議室

3 議事次第

(1) 企画部会の取組状況について

(2) 令和5年度の木材利用促進月間の取組について

4 議事概要

- ・ 既製品の建具を利用することが一般的で、内装材として無垢材を使う設計者が少ないことが課題である。狂い、反り、傷みの懸念があることや金銭面について施主を説得しながら進める人も少ない。
- ・ 米松をスギに置き換えても、建築構造的に問題ないことが分かったが、補助金ありきの部分がある。通常対価で使えるようになるのかというところも議論していかないといけない。
- ・ 建築時において、設備の変更に比べて、木材の変更による費用増減はそれほど大きくない。設備のように、木材についても、もっといいものを作りませんかと説得することができるのではないかと。構造材の材料調達がしやすくなれば、米松を国産材に置き換えできる可能性も高まる。
- ・ 6mのスパンだと、無垢材では強度が不足し、集成材にする必要があった。スギは強度が問題になるので、スギの横架材について研究していただきたい。
- ・ 京都の木材を使っても、思ったよりも価格に差がないと感じた。和室は高価なイメージが消費者にあるため、洋室の端に畳スペースを作るようなことが流行した。消費者に近い工務店の方が、消費者に勧めていただくことも大切ではないか。
- ・ 川下に位置する工務店は、施主の要望を一番聞ける立場だが、いかに施主に木材を勧め、説得できるかは費用面以外にも様々な課題がある。木材に対する市民の意識を変える活動をもっと進める必要がある。
- ・ 木の快適さに関心を持つ消費者は多いだろうが、その価値を伝えることに関しては、訴求力はマーケティングが得意な住宅設備業界に合わない。一方で、アレルギーなどに苦しむ子供のご家族に健康面をPRするとよいかもかもしれない。
- ・ 一般の方の木材や森林に対する認知度はこれからの状況。もっと木の良さや効果を発信していくことが大事ではないか。大人は文面で理解できるが、子どもは、木に触れて良かったという原体験をしておくことで、将来、木造住宅を選ぼうとってくる。引き続き、木材の魅力発信について、企画部会で検討したい。
- ・ 不動産流通の立場からすると、木材だけに着目することは難しいが、京都の企業で中規模木造建築物のPRを始めているところもある。裾野が広がっていければよい。

- ・ 店舗の木質化は、お客様や従業員に高級感やリラックス効果を遡及できるので、これから導入を考えていきたいと感じる。また、環境配慮型の住宅ローンが発売したが、木材には着眼できてないため、ラベリング制度を参考にして、インセンティブを検討することも考えられる。
- ・ 木材利用や森林保全活動の社会的な価値を可視化して、経済効果を算出できないかを検討してみた。消費者に訴えられる分かりやすい可視化は、企画部会でも検討していきたい。
- ・ 京都を代表する木材である北山杉の販売促進を目的として、京都・北山杉 PR BOOK を作製した。北山杉、北山丸太について、歴史や製品の詳細、使用事例を紹介している。様々なところでお使いいただきたい。
- ・ (一社)京都府建築士会の木造建築研究会で、国産材の使用事例と設計者の情報などをウェブで発信する「純粹無垢な京の木づかい」という事業を始めている。木を使う機運を高め、設計者に木を使うハードルを下げてもらうことに加え、消費者が事例を見て詳しい話も聞けることにも繋げたい。
- ・ 「まちの匠・プラス」という耐震化の補助事業を開始するが、市民の関心が高まっているので、今後、耐震改修に繋がってくると思う。小中一貫教育校2校の校舎整備で大規模木造の取組をしているが、当初に想定していた精度よりも高い寸法精度が求められるなど、木造ならではの難しい点があることを痛感している。
- ・ 古民家を活用した観光など、建築以外の分野でも動きが増えてきている中で、木をどう使えばよいか伝える取組みや、一緒に考えてくれる構成員を増やすことも考えられる。他にも、温暖化防止を含め、社会全体にウッド・チェンジをビルトインしていくことを議論するため、制度や業界の枠を超えて相互に連携していきたい。
- ・ 花粉の飛散が少ないスギに植え替えるためには、木材の消費を増やす必要がある。また、災害が激甚化したので防災の観点で早めに森林の手入れをして、生命財産を守るという大課題にもウッド・チェンジが関係しており、社会情勢は変わりつつある。
- ・ 北米では、木材産地に市民が来て、木を選んで買うことがある。京都市の木材利用促進月間が川上と川下の交流のモデルに繋がっていけばよい。
- ・ プロダクトアウト、マーケットインのどちらに偏っても駄目で、絶妙なバランスをコーディネートすることが大事。
- ・ 経済効果の面からは市内産木材を利用してほしいが、市内産木材だけに拘るとウッド・チェンジは進まない。木を使う運動と市内産木材を使って地域の森林を守ろうという運動を合わせて、取り組んでいきたい。
- ・ 木を使うことのメリットはかなり浸透してきていると思う。そのうえで京都産

材を使ってもらえるようにしていく必要がある。町家の再生など京都が取り組む意味合いがわかりやすく発信できたらと思う。京都が「木の文化都市」で木を使うことを大事にしている都市であることを分かりやすく伝えられれば、木を使うときに、京都産材を使おうということに進んでいくのではないか。わかりやすい情報発信をしていきたい。

- 文化庁が京都に来るのに合わせ、「文化と産業の交流拠点（仮称）」を旧富岡鉄斎邸跡地にオープンした。この施設は、京都の職人の技術と木材を使って作っている。また、先ほどお話のあった J-クレジット関連では、我々が支援する京大発のスタートアップが森林を AI で分析し炭素吸収量を図るようなことをしている。建築以外の視点からもウッド・チェンジを考えていくこともできると思う。
- 10月8日の木材利用促進の日を祝日にして、木の良さに触れてもらう、文化に触れてもらう日とするなど、インパクトがある取組も大切である。

以上